

子育てひろばにおける子育て相談の内容と役割： 子育て相談記録票と支援職員のインタビューから

上 田 淑 子・稲 垣 由 子

Contents and Role of Childrearing Consultation in Parenting Support Program:
Summary of Consultation Record Sheets and Interview with the Supporting Staff

UEDA Yoshiko and INAGAKI Yuko

Abstract : The four-year (2011-2014) data of 404 consultation record sheets in Konan Parenting Support Program held by Konan Women's University were analyzed to know the trend of consultation. "Parental involvement with children" was the most frequently consulted issue on the whole, followed by "nutrition issue including baby food and unbalanced diet", and "life habit issue such as toilet training and life rhythm". The issues significantly more frequent in specific ages were "nutrition issue" for 0- and 1-year old, "growth and development" for 0-year old, and "violence and tantrum" and "nursery and preschool education" for 2-year-old children. The results of interviews with three supporting staffs suggested that most mothers first joined the program as a playing space for their children but they later recognized it for themselves, most of their issues were not troubles to be solved but to ask staff's sympathy and acceptance, and therefore the staff tried to keep an attitude of acceptance for consultation. Because the staff felt the skill to involve with children's parents difficult, it is necessary to support them for improvement of counseling skill.

Key Words : parenting support program, childrearing consultation, involvement with children, attitude of acceptance, counseling skill

要旨 : 甲南女子大学甲南子育てひろばにおける子育て相談の傾向を知るために、2011～2014年度子育て相談票404枚に記録された相談項目を分析した。その結果、全体では相談件数は「子どもとの関わり」が最も多く、次いで「食事（離乳食、偏食等）」、「生活習慣（トイレトレーニング、生活リズム等）」の順に多かった。特定の年齢で有意に相談が多い項目は0歳と1歳の「食事」、0歳の「成長、発達」、2歳の「乱暴、かんしゃく等」と「保育所、幼稚園、幼児教室等」で、いずれも子どもの成長や発達に応じた相談であった。ひろば支援職員へのインタビュー調査から、母親の多くは、最初は子どもの遊び場を目的にひろばに参加するが、参加して後でひろばが自分自身のためになることに気付くこと、また、相談は問題を解決するためではなく共感を得るための内容がほとんどであり、そのため、対応は受容的態度を心がけていることが示唆された。支援職員が難しいと感じるのは保護者と関わるスキルであり、カウンセリング力向上のための援助が必要である。

キーワード : 子育てひろば, 子育て相談, 子どもとの関わり, 受容的態度, カウンセリング力

I. はじめに

本学（甲南女子大学）では2004年に地域の子育て

支援と学生教育のために『甲南子育てひろば』を開設した。これは国の「少子化社会対策大綱」に基づいた子育て支援活動事業に則ったもので、2007年からは「地域子育て支援拠点事業」として神戸市から委託を

受けた連携事業として活動を展開している。地域子育て支援拠点事業とは、児童福祉法第 6 条の 3 第 6 項に基づき市町村が実施する事業であり、その基本事業として、①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進、②子育て等に関する相談、援助の実施、③地域の子育て関連情報の提供、④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施、の 4 つが明記されている (厚生労働省, 2015)。神戸市にある大学では、本学の他に神戸大学、神戸松蔭女子学院大学、神戸親和女子大学、神戸常盤大学、神戸市看護大学の計 6 大学がそれぞれ市と連携した子育て支援活動を行っている (神戸市, 2015)。

甲南子育てひろばは、0 歳から年度内に 3 歳になる子どもとその保護者を対象に、専用の教室にて平日午前と、水曜を除く平日午後 2 時間か 2 時間半開室している。利用は各時間帯最大 10 組までで、予約 (登録) 制である。開室中は子育て支援職員として 3 名の保育士が常駐し、手遊び、絵本、自由遊び、おやつ、片付けなどのプログラムを実施し、同時に子育てについての相談に乗ったり、情報を提供したり、助言その他の援助を行っている。また、月に一度「わいわいトーク」と称して、学内の各専門分野の教員が子育てに関して情報提供する機会を設けている。甲南子育てひろばの活動内容は甲南子育てひろばのホームページ (<http://www.konan-wu.ac.jp/~r-kodomo/>) に報告している。

労働政策研究・研修機構 (2015) による第 3 回子育て世帯全国調査によれば、6 歳未満の子どもを育てている世帯の保育所利用率は 38.5% であるが、第 1 回・第 2 回調査に続き上昇傾向にある。しかし、家庭での子育ては、核家族化と地域コミュニティへの繋がりの希薄化によって、相談相手がいなかったり、周囲の援助がなかったりすることが多く、不安や負担が増大していることが考えられる。実際、NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 (2016) が地域の子育てひろばを利用した母親を対象に行ったアンケート調査では、72% の母親は自身が育っていない市区町村で子育てを行っており、そのうちの 59% が「子育ての悩みや不安を話せる人が欲しかった」かどうかという問いに「はい」と答えている。その割合は自身が育った市区町村で子育てをしている母親に比べて 13 ポイントも高い。こうした子育ての不安や負担を和らげることも地域子育て支援拠点の基本事業② (子育て等に関する相談や援助) の目的である。

小田ら (2011) は 2008, 2009 年度に甲南子育てひろ

ろばを利用した保護者を対象にアンケート調査を行っている。その結果、ひろばに参加した 1 番の理由として選択肢の中から「こどもの遊び仲間が欲しかった」か「子どもが安心して遊べる場だと思った」を選んだ保護者が最も多く、それらの合計は全回答者の 2/3 を占めた。これは、地域子育て支援拠点の基本事業①にある「子育て親子の交流の場」としての甲南子育てひろばに対する期待であるといえる。一方、基本事業②である子育て相談・援助を期待している「子育てに不安があった」をひろば参加の第 1 の理由とした保護者はいなかった。しかし、2009 年度に甲南子育てひろばを利用した親子 110 組 (延べ保護者数は 1610) からの子育て相談は 121 件あり (小田ら, 2011)、平均すれば 1 組あたり 1.1 件、開室日あたりでは 2 日に 1 件の頻度であった。ひろば参加の理由が子育て相談ではないにもかかわらず、子育て相談は日常的に行われていると言ってもいいであろう。

甲南子育てひろばにおける保護者からの相談は、その後の支援活動に役立てるために相談を受けた支援職員が閉室後にチェックシート形式の「子育て相談票」に相談事項を記録している。小田ら (2011) が 2009 年度の 121 件の相談票を集計した結果、相談項目は子どもとの関わりに関するものが最も多く、全体の約 1/4 (31 件) を占めた。本論文では、2011 年度から 2014 年度までの相談票を分析し、子どもの性別、年齢、および年度、時期によって相談項目に違いがあるかどうかを検定し、子育ての悩みや不安の傾向を分析する。また、子育てひろばにおける子育て相談の役割や支援職員の対応方法について知るために、支援職員にインタビュー調査した結果を報告する。

II. 方 法

分析した甲南子育てひろばの相談記録票は、2011 年度から 2014 年度までに子育てひろばの支援職員が記入したものである。記録票には相談日付、子どもの性別と年齢、相談者の続柄の記入欄があり、あらかじめ分類された 18 項目の相談内容にチェックを入れる様式になっている (表 1)。最後の項目「その他」にはその内容の記述欄が設けてある。本稿では、各項目を表 1 に示した下線を付した単語で略記する。

子育て相談票の男女、年齢、年度、および時期によって相談内容に変化があるかどうかを知るために、各項目に記入されたチェックの数 (以下、件数という) について χ^2 検定 (両側) を行った。その際、期待値

表1 子育て相談票における相談内容の分類。本文および他の図表では下線で示した単語で略記する。

相談内容
①授乳, 卒乳
②離乳食, 偏食, <u>食事</u>
③ <u>生活習慣</u> (トイレトレーニング, 生活リズム等)
④ <u>内気</u> , 引っ込み思案, 泣き虫, いじめられる
⑤ <u>乱暴</u> , かんしゃく, ケンカ, 反抗等
⑥ <u>落ち着き</u> がない, 注意散漫
⑦ <u>ことば</u> の遅れ, 吃音, 幼児ことば
⑧ <u>成長</u> , 発達
⑨子どもの <u>病気</u> , 予防接種等
⑩気になる <u>くせ</u> (爪かみ, 指しゃぶり, チック等)
⑪ <u>夜泣き</u> , 夜驚, 夜尿
⑫子どもとの <u>関わり</u>
⑬ <u>親自身</u> の問題
⑭ <u>祖父母</u> , 父母の考え方の違い
⑮隣人, 保護者, 保育士等との <u>人間関係</u>
⑯ <u>幼稚園</u> , 保育園, 幼児教室, おけいごと等
⑰ファミリーサポート, <u>一時保育</u>
⑱ <u>その他</u>

が5未満の項目の期待値合計が20%以上ある場合は、件数の少ない項目をまとめ、有意差があるケースについては検定後の残差分析によって期待値から有意な差がある項目を調べた。

3名の支援職員へのインタビューは2015年7月に行った。支援職員は3年から6年の保育所(1名は幼稚園を含む)勤務経験がある非常勤女性保育士である。インタビューはひろば閉室後に他の保育士に聞こえない別の部屋を使い、それぞれ20分~30分間程度、1)ひろばを利用している保護者に対する印象、2)相談内容と対応方法、3)保育所保育士との役割の違い、の3つの質問を含めた半構造化面接で行った。会話は回答者に了解を得た上でICレコーダーに記録し、後日文字起こしを行った。

III. 結 果

1. 子育て相談項目

記録票は4年間で計404枚あり、2013年度が最も多く112枚、2012年度が最も少なく75枚であった(表2)。相談者は、続柄が未記入の11名を除く393名中390名(99%)が母親で、他に父親が2名、その他が1名いた。相談票の子どもの性別は男47%(190名)、女53%(214名)で女兒が多く、年齢は0歳12%(48名)、1歳43%(172名)、2歳35%(142名)、3歳以上10%(41名)で、1歳と2歳で約8割を占めた。複数の項目にチェックがある相談票は404枚中91枚(23%)あり、4年間にチェックされた項

表2 各年度の相談票枚数とその内訳、および相談項目の延べ件数。年齢別内訳の合計が枚数と一致しないのは年齢未記入の相談票があるため。

年度	2011	2012	2013	2014	合計
相談票枚数	108	75	112	109	404
内訳：男児	50	37	51	52	190
女児	58	38	61	57	214
0歳	9	10	16	12	47
1歳	54	33	45	40	172
2歳	33	27	46	36	142
3歳以上	12	5	5	19	41
延べ件数	134	98	136	140	508

目の延べ数は508件になった。年度ごとの相談票枚数とその内訳(子どもの性別と年齢別)、および項目件数を表2に示す。男女比は各年度女児が男児の1.0~1.2倍でほぼ一定であった。年齢別には2011年度に1歳児が全体の50%、2014年度に3歳以上が17%で、それぞれ他年度よりかなり多かったが、 χ^2 検定では有意差($p=0.056$)にならなかった。

4年間全体の集計で件数が最も多かった相談項目は「関わり」で76件、次いで「食事」69件、「生活習慣」67件、「乱暴」50件となり、これら4項目で全件数の過半数(52%)を占めた(図1)。5位以降で相談が20件を超えたのは、「成長」40件、「その他」39件、「幼稚園」32件、「親自身」25件、「ことば」24件、「内気」21件の6項目であった。以上の相談件数が多い10項目を本稿では「上位10項目」と呼ぶことにする。一方、相談が10件未満の項目は、少ない順に「人間関係」3件、「サポート」4件、「夜泣き」6件、「祖父母」6件、「落ち着き」8件であった。

相談項目についての男女の違いは、全体の人数が女児の方が多いため、多くの項目で女児が男児より件数は多かったが、上位10項目でとくに女児に多かった項目は「幼稚園」(男児の1.9倍)、「親自身」(同1.8倍)、「関わり」(同1.6倍)であった(図1)。逆に男児に多かった項目は「ことば」(女児の2.0

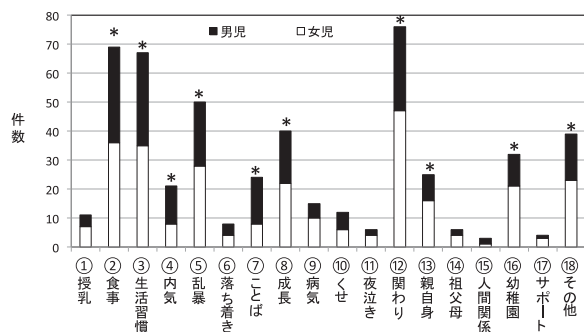


図1 子育て相談票の2011~2014年度集計結果。相談件数上位10項目を*で示す。各項目の詳細内容は表1を参照。

表 3 上位 10 項目の相談の年齢別延べ件数。各年齢において最も多い項目を†, 2 番目に多い項目を‡で示す。

年齢	食事	生活習慣	内気	乱暴	ことば	成長	関わり	親自身	幼稚園	その他 (他項目計)	合計	
0 歳	15†	3	0	2	1	9‡	8	3	1	4	11	57
1 歳	42†	25	7	18	13	11	27‡	10	8	15	32	208
2 歳	11	27‡	8	27‡	8	15	31†	10	19	14	18	188
3 歳以上	1	12†	6	3	2	5	10‡	2	4	6	4	55

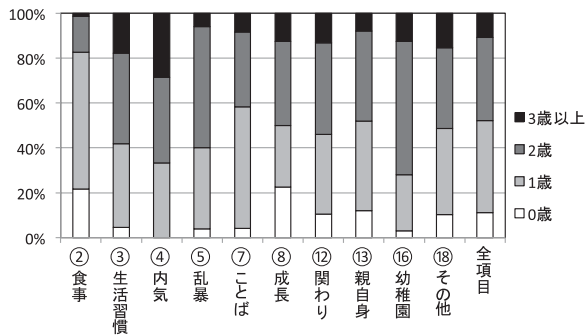


図 2 相談件数上位 10 項目の年齢別割合。各項目の詳細内容は表 1 を参照。

倍)と「内気」(同 1.6 倍)であった。しかし、件数が少ない 3 項目(「祖父母」, 「人間関係」, 「サポート」)を 1 項目としてまとめて全 16 項目にした χ^2 検定では、男女の違いは有意ではなかった ($p=0.58$)。年齢別に男女の違いを検定した場合でも有意な違いはどの年齢にも認められなかった。

年齢別に各項目の件数をみると全体の総数で最も多かった「関わり」は、0 歳を除き、どの年齢でも 1 番目か 2 番目に多い相談であった(表 3)。「関わり」以外では、0 歳は「食事」と「成長」、1 歳は「食事」と「ことば」、2 歳は「生活習慣」と「乱暴」と「幼稚園」、3 歳以上は「生活習慣」に関する相談の件数または割合が多かった(表 3, 図 2)。特定の年齢に過半数の相談が集中したのは、1 歳の「食事」(69 件中 42 件)と「ことば」(24 件中 13 件)、2 歳の「乱暴」(50

件中 27 件)と「幼稚園」(32 件中 19 件)であった。

「食事」「生活習慣」「乱暴」「成長」「関わり」「幼稚園」「その他」の 7 項目と、それより件数の少ない項目をまとめて計 8 項目を年齢別に分けて χ^2 検定を行った結果、年齢による相談内容の違いは有意になった ($p<0.01$)。残差分析の結果、期待値から有意に異なった項目は「食事」に関する相談で、1 歳以下で多く、2 歳以上で少なかった(表 4)。また、0 歳で「成長」、2 歳で「乱暴」と「幼稚園」に関する相談件数が有意に多かった。

相談内容の傾向は年度によっても違いが見られた。各年度で最も件数が多い 2 項目を多い順に列挙すると、2011 年度は「生活習慣」と「関わり」、2012 年度は「関わり」と「食事」、2013 年度は「食事」と「その他」、2014 年度は「食事」と「乱暴」であった(表 5)。4 年間の総数で 1 位「関わり」と 2 位「食事」は年度単位でも 2 位以内になる年が多いが、4 年間うち前 2 年では「関わり」に関する相談が多く、後 2 年では「食事」に関する相談が多いという変化があった。また、全体の件数は「関わり」や「食事」より少ないが、「ことば」に関する相談は 2011 年に集中した(図 3)。件数の少ない下位 6 項目をまとめて 13 項目で χ^2 検定を行った結果、年度間に有意 ($p<0.01$) な違いが見られた。残差分析では、2011 年度の「生活習慣」と「ことば」のみが有意に多く、反対に 2011 年度の「親自身」、2013 年度の「成長」、2014 年度の「こと

表 4 年齢×項目の χ^2 検定後の調整済み残差(「その他」と件数が少ない項目を除く)。期待値より有意 (**, $p<0.01$; *, $p<0.05$) に多い(正)または少ない(負)項目を**, *で示す。

年齢	食事	生活習慣	乱暴	成長	関わり	幼稚園
0 歳	3.3**	-1.7	-1.6	2.6**	0.0	-1.4
1 歳	3.6**	-0.6	-0.7	-1.8	-1.0	-1.9
2 歳	-4.0**	0.5	2.5*	0.0	0.6	2.6**
3 歳以上	-2.7**	2.0	-1.2	0.4	0.7	0.3

表 5 上位 10 項目の相談の年度別延べ件数。各年度において最も多い項目を†, 2 番目に多い項目を‡で示す。

年度	食事	生活習慣	内気	乱暴	ことば	成長	関わり	親自身	幼稚園	その他 (他項目計)	合計	
2011	12	27†	7	11	12	12	25‡	1	10	1	16	134
2012	12‡	10	5	8	7	9	21†	8	5	4	9	98
2013	25†	12	3	12	4	4	14	10	12	19‡	22	137
2014	20†	18	6	19‡	1	15	16	6	5	15	18	139

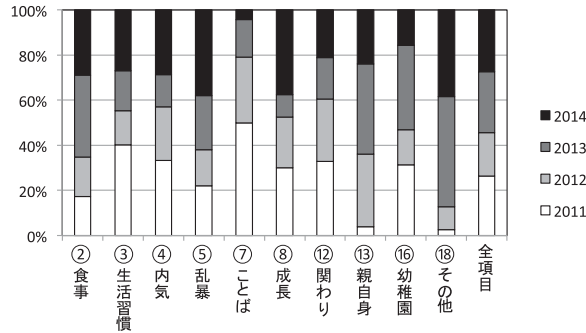


図3 相談件数上位10項目の年度別割合。各項目の詳細内容は表1を参照。

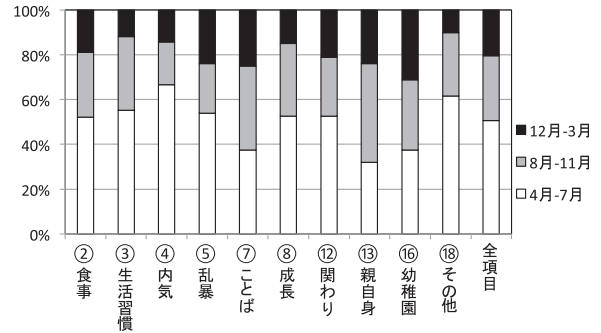


図4 相談件数上位10項目の期間別割合。各項目の詳細内容は表1を参照。

表6 年度×項目の χ^2 検定後の調整済み残差（「その他」と件数が少ない項目を除く）。期待値より有意（**、 $p < 0.01$ ；*、 $p < 0.05$ ）に多い（正）または少ない（負）項目を**、*で示す。

年度	食事	生活習慣	内気	乱暴	ことば	成長	病気	関わり	親自身	幼稚園
2011	-1.8	2.8**	0.7	-0.7	2.7**	0.5	-1.2	1.4	-2.6**	0.6
2012	-0.4	-1	0.5	-0.6	1.3	0.5	-1.3	2	1.7	-0.5
2013	1.9	-1.8	-1.3	-0.5	-1.2	-2.5*	0.6	-1.8	1.5	1.4
2014	0.3	-0.1	0.1	1.8	-2.6**	1.5	1.7	-1.3	-0.4	-1.5

表7 上位10項目の相談の期間別延べ件数。各期間において最も多い項目を†、2番目に多い項目を‡で示す。

期間	食事	生活習慣	内気	乱暴	ことば	成長	関わり	親自身	幼稚園	その他（他項目計）	合計
4月-7月	36	37‡	14	27	9	21	40†	8	12	24	257
8月-11月	20‡	22†	4	11	9	13	20‡	11	10	11	147
12月-3月	13‡	8	3	12	6	6	16†	6	10	4	104

ば」は有意に少なかった（表6）。

期間別の比較は4ヶ月単位で年度内を3期に区分して行った。件数は4-7月の年度初期に過半数の相談があり、8-11月の中期、12-3月の終期になるにつれて減少した（表7）。各期で1番または2番目に多かった項目はいずれも全体の集計での上位の3項目（「関わり」、「食事」、「生活習慣」）であった。しかし、項目別の期間割合では年度初期は「内気」、中期は「親自身」、終期は「幼稚園」が最も高く、件数とは異なる傾向を示した（図4）。件数が少ない5項目を1項目にまとめて全14項目についての χ^2 検定では、期間による件数の違いは有意ではなかった（ $p = 0.47$ ）。

2. 支援職員へのインタビュー

3つの質問に対する3名の支援職員（A 保育士、B 保育士、C 保育士とする）の言葉の中からの確に質問に答えた言葉を抽出し、主要箇所を下線を付して以下に記す。

(1) ひろばを利用している保護者に対する印象

A 保育士：

- ・おうちにもっているわけじゃなくて、どんどん世界を広げてあげようっていう、子どものもあるし、そうですね、自分の仲間を作っていこうとか、そう

いう意味ではいろんな意味で積極的に外に出ていこうとしているのは感じます。（中略）悩み事があったりするのを聞いてもらえる仲間を求めていたり、これぐらいの子どもだったらどんなふうなことをしているのかなっていうのが見れるのかなっていう、そういう機会を作ろうとしているというのがすごく感じられます。

- ・まだ保育園や幼稚園にっていう年齢ではないですから、近くに保育所で一緒に遊ぶお子さんとかいればいいですけど、そういうのがないからそういう場を求めているんですね。

B 保育士：

- ・ここに連れてきて遊び場の一つにしてらっしゃるお母さんもいれば、本当に0歳、1歳の第一子でどうしていいかわからないっていうなかで、ここにきて少しでも子育てに役立てる情報がほしいとか、なにか悩みがあるときに寄り添ってくれる人がほしいとかっていうので、来られるっていうような、そういういったパターンに分かれると思うんです。

C 保育士：

- ・子育てひろばは親子で遊ぶ場として場所の提供というかたちでしているんですが、実際に親子の方々きて遊んでいる姿とかを見ていると、お母さんたちが

リフレッシュするために来ているということもあるのかなというのを考えています。(中略)最初は同じ年, お子さんの友達を見つけたいとか, ちっちゃい子が遊べる場がなかなかないからっていうので参加される人も多いのは多いんですけど, 実際終わる頃にはお母さん自身がリフレッシュできたとか, そういう声もあるので, そうなのかなとは感じています。

(2) 相談内容と対応方法

A 保育士 :

- ・ どういうことを感じていてどういう気持ちなのかというか, そういう気持ちを受け止めるという, お話を聞くようにまずはしています。(中略) そんなんやったらしんどかったね, みたいなことだったら, それを共感するというかそういう感じです。
- ・ もちろん私たちで解決できるようなことでなければ相談したり調べたりっていうので, 一旦持ち帰って後日っていうか, そのときに解決できることであれば, お話できることであればしますけれども, ちょっと間を置いてまたお返しするという場合もあります。

B 保育士 :

- ・ 悩みを抱えてらっしゃるお母さんには, 迎え入れるときにちょっとした言葉掛けだったり, お子さんの成長を一緒に見守ってますよというようなのがわかるような接しかたができたらなと努めています。
- ・ お母さんが例えば保健師さんにこんなことをいわれて辛かったとかっていうような悩みを聞いて, その発達に対しては口は出せないんですけども, そういう言いかたをされたら辛かったですよねとかっていうようなことで, お母さんの気持ちに寄り添えるようにはしています。
- ・ 例えばトマトを食べないだけけれども, なんか食べる方法はないですかみたいなことを相談されたときには, ほかのお母さんとかに投げかけてみて, (中略) お兄ちゃんお姉ちゃんがいる (中略) お母さんとか, そういうときはこういうふうにしたほうがいいよ (中略) とか, そういうお母さんの持っている情報とか知識とかも引き出して, みんなにシェアしていけたらなって
- ・ 本当にこれを解決したいっていうような相談ではない相談が結構多いです。ほほまやきのような相談もあるし, ただただ愚痴を聞いてほしいっていうような相談もありますし, あとは成長過程のなかで悩みがあって, それはすぐには解決はできないけど時間

が経てば, きつとなにに君もわかってくれますよじゃないけど, そういうような。なだめて解決というか, なだめて気持ちを落ち着けてもらうといううなかたちになるので, すべてがすべて解決っていうわけではないですけども。

C 保育士 :

- ・ 自分の答えられる範囲ではお答えはするんですけど, 必ずしも「こうです」っていう答えかたはしてなくて, それも一つの考えですよねという提案というか, (中略) 例えば, この子にはそういうふうにやたらうまくいったけど, 違う子にはうまくいかないとかっていうこともあるので, (中略) そういうふうに答えています。
- ・ 話すこと。愚痴ではないですけど話すことで, ちょっとすっきり。こっちが寄り添うことで自分だけじゃないだとか, 私が思ったのは間違っていないだとか, 例えばお母さんが解決はできなかったとしても, 思いに寄り添うことでだいぶ気持ちは楽になってはくれるのかなという気はしています。
- ・ すぐに答えられないときは自分なりに調べてから, 来週またお答えしてもいいですかって。私も考えてみますっていう話でお母さんにして, 次の週に考えてみたんですけどって話すこともあるし

(3) 保育所保育士との役割の違い

A 保育士 :

- ・ あくまでもお母さんとお子さんがゆっくり向き合えるような場というか雰囲気をつくるとか, そういうのが役割だと思います。
- ・ 一人で悩み事を抱えているのが, ちょっとでも荷物が軽くなればいいっていう, そういうのも手助けになるために必要なかなっていう, そういう役割があるのかなと思います。
- ・ 親子で来れるからこそ, そのお子さん姿も見れるし, 普段の接し方とかも見れるので。(中略) 保育園の方々はお子さんだけ見てて, もしかしたらおうちでこんなこと, こういう感じなのかなとか想像でしか, 半分は想像になっちゃうけども, ここでしたら, もちろん, おうちとまったく同じ環境ではないでしょうけど, お子さんとの接し方っていうのは生で見れますので, そういう意味では違うかもしれないですね。

B 保育士 :

- ・ 保護者同士の交流であったり, スタッフに話を聞いてもらったりっていうのを求めてこられてるんだなっていう感じるので, (中略) 保育の技術っていう

のはあんまりここでは求められなくて、いままで保育園でも幼稚園でも、その保育の技術ばかり磨いていたので、いわば人と接する、カウンセリングじゃないんだらうけど、そういった相談員のような、そういったスキルというか、そういったものもすごい求められてるなっていうのは感じます。あとはやはり知識、子どもに対しての知識、いろんな分野での知識が求められてるなっていうのを、すごいここにきて感じました。

- ・子どもの病気であったり離乳食であったり、そういう子どもに関しては広域にわたってすごい知識が必要なんだと思うんですけど、それ以外にもお母さんたちがリラックスできる場所の知識であったり、子どもを連れていける、例えば食事ができる場所とか美容院とか、そういったような地域の公共のものっていう、そういったものに対しての知識ももうちょっと蓄えないといけないなと思って。

C 保育士：

- ・お母さんと子どもとの距離感がすごく難しいけど、あんまりお母さんとお子さんにべったりくっついて話を聞いたりとかっていうわけでもなく、かといって勝手に遊んでてくださってというわけでもなく付かず離れず。(中略) お母さんによっては悩みをいっぱい聞いてほしいお母さんであったり、そっとしておいてほしいお母さんだったり。ほかのお母さん、親子と遊びたいお母さんとか、逆に先生と遊びたいとか、それぞれ思ってることが違うから。
- ・“最初は遊び場を求めてくるけど、実際にきてみたらそうじゃないことが多いから、やっぱりそういうのが相談できてこそで、子どもが遊べてお母さんにも子どもにもメリットがあるような場所なのかなと思ってます。

IV. 考 察

甲南子育てひろばの子育て相談票の集計では、子どもとの関わり方についての相談が最も多く、次いで離乳食や偏食など食に関する問題、トイレトレーニングや生活リズムなどの生活習慣に関する問題が多かった。子育て相談は、初めての子育てにおいて未経験であるために感じる不安や迷い、病気や強い個性など子どもの特別な事情の問題、子どもを取り巻く環境の問題の3つに大きく分けられるが、相談件数が多い「関わり」「食事」「生活習慣」はいずれも日常の育児のノウハウであり、初めての子育てで感じる不安に基づく

相談であるといえる。ひろばを利用した母親の多くが初めての子育てであることは、先に報告された甲南子育てひろばの利用状況(小田ら, 2011)において7割近くが第1子との参加であったことから裏付けられる。3つの相談項目の中で、とくに子どもとの関わりは幼児期だけでなく成人後までも続く親子関係の始まりでもあり、その時期の母親と子どもとの関係性は子どもの発達や将来の性格にも影響することは多くの研究で明らかにされている(例えば、徳田, 1987; 菅原・伊藤, 2006; 森下・阿部, 2013; 中道, 2013など)。その意味からも子育て相談の意義はきわめて大きいといえよう。子どもとの関わりについての相談が最も多かったのは2009年度の小田ら(2011)の調査でも同じであり、多くの母親が自らの子どもとどう向かい合うかという本質的な問題に迷いがあることをうかがわせる。

記録票の分析では、子どもの年齢間で相談項目の件数に有意差が見られ、有意に件数が多い項目は、0歳と1歳の「食事」、0歳の「成長」、2歳の「乱暴」と「幼稚園等」であった。相談票は「その他」の記述欄を以外、項目にチェックがあるだけで相談の具体的な内容は不明である。しかし、上記の相談項目がなぜ多いかは、その年齢の特徴から推察できる。0歳は離乳食、1歳は幼児食の年齢である。また、0歳は身長や体重だけでなく寝返り、ハイハイ、掴まり立ちといった運動機能の発達が最もよく見える時であり、とくに第1子には“這えば立て、立てば歩め”の親心が膨らむ時でもあるため、0歳の「成長」が親にとって期待とともに大きな心配事でもあることは想像に難くない。2歳は「魔の2歳児」とも「イヤイヤ期」ともいわれる第一次反抗期であり、それが子どもの成長に欠かせない自我の芽生えと分かっているにもかかわらず、未経験な母親は暴れたり癇癪を起こしたりする子どもに戸惑うのが当然であろう。さらに、平日に子育てひろばに参加している母親は家庭で子育てをしていると考えられるが、2歳で幼稚園や保育所等に関する相談が多いのは、3年保育の幼稚園選びや育児休暇期間の終了といった理由が想定される。以上のように、相談票から得られた項目別件数から、子育てひろばの相談の多くは子どもの成長に応じた内容であるといえる。

相談票の項目別件数は年度間で有意差がみられ、2011年度に「生活習慣」と「ことば」が有意に多かった。2011年度の参加者は、有意な特徴ではないが1歳児が他の年より多かったことが、その年度に「ことば」の相談が多かった理由として考えられる。1歳は

意味あることばを発し始める年齢であり、年齢別の分析でも「ことば」の相談の過半数の件数を 1 歳が占めた。しかし、「生活習慣」について有意な違いが現れた理由は本研究では不明である。

支援職員に対して行ったインタビューの結果は次のようにまとめられる。まず、保護者に対する印象は、ひろばを利用している保護者は積極的に外に出ていこうとしている母親であり、利用の目的は子どもの遊び場、子育ての情報、話し相手、悩み相談など人によって異なっている。最初は子どもの遊び場が目的でも、最終的には母親のリフレッシュにつながっている。こうした印象は先に行われた子育てひろば利用者へのアンケート調査(小田ら, 2011)の結果とはほぼ一致している。すなわち、ひろば利用の 1 番の理由は「子ども遊び場が欲しかった」と「子どもが安心して遊べる場だと思った」が最も多く、一方参加してみて感じたことでは、「自分自身の話し相手や子育て仲間ができた」が最も多く、次いで「子どもの遊び仲間ができた」、「自分自身がリフレッシュできた」、「子育てについて学ぶことができた」が順に多かった。これらの結果は、ひろば参加の最初の目的は子どものためでも、参加した結果、母親(自分自身)のためにもなることに気づいたことを示している。地域子育て支援拠点事業は子育てする親を支援することが目的であるにもかかわらず、多くの親には安全な子どもの遊び場提供という狭い意義しか認知されていないのではないかと推察される。

インタビューの 2 つ目の質問である相談内容と対応方法については、まず B 保育士、C 保育士の言葉から、相談はただ話を聞いて共感を得たいための内容がほとんどであることがうかがわれる。相談の対応方法では「気持ちを受け止める」「共感する」「気持ちに寄り添う」といった言葉が各保育士に共通していた。相談者に対するこうした受容と共感的態度は『地域子育て支援拠点事業における活動の指標 地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」普及版』(こども未来財団, 2010)に記されていることでもあるが、相談の内容が共感を得たいだけの内容が多いことから、子育てひろばの支援者にはとくにそうした受容と共感の姿勢が重要になる。なお、保育士の回答では、相談の中には答えを求められ、かつ、その場で答えられない内容もあるが、そうした相談は持ち帰って後日回答するか、他の母親に知識を借りるという方法が取られている。

最後の質問の保育所保育士との役割の違いについて

は、A 保育士は親子が向かい合える場づくり、B 保育士は親同士の交流やスタッフとの相談、および情報提供、C 保育士は異なる目的の母親への対応、といった異なる回答であったが、共通したのは母親の相談(悩み)を聞くという役割を 3 名とも挙げたことである。同時に B、C 保育士は、保護者と関わるための保育技術とは異なるスキル(C 保育士の言葉では距離感)の難しさと必要性を訴えている。金子(2007)が、2006 年に全国の子育て支援センター(現在の地域子育て支援拠点事業一般型の前身の 1 つ)を対象にアンケート調査を行い、センターに求められる専門性を聞いたところ、もっとも多い回答は「保護者へのカウンセリングができる力」であった。金子は支援事業の職員の専門性として児童虐待を含めた深刻な問題への対応をも念頭においているが、深刻ではない日常的な子育て不安を解消する場合でも支援職員のカウンセリング力によってその効果に大きな差が出ることが予想される。こうしたことから、今後の課題として、子育てひろばの機能を高めるためには支援職員のカウンセリング力の向上が必要であり、支援職員に対して専門家による研修や講習会等の機会が提供されることが望ましい。

謝辞

本研究の目的をご理解いただき、ご多忙の中でインタビューにご協力いただいた甲南子育てひろば支援職員である保育士 3 名の方に心から御礼申し上げます。

引用文献

- 金子恵美(2007) 地域子育て支援拠点におけるソーシャルワーク活動-地域子育て支援センター全国調査から-。日本社会事業大学研究紀要 54. 129-150
- 神戸市(2015) 大学と連携した地域子育て支援拠点づくり。 <http://www.city.kobe.lg.jp/child/grow/support/daigaku.html> (2016 年 10 月 28 日閲覧)
- 厚生労働省(2015) 地域子育て支援拠点事業の実施について(実施要綱)。 <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidokateikyoku/0000103063.pdf> (2016 年 10 月 28 日閲覧)
- こども未来財団(2010) 地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」普及版。 https://koso-datehiroba.com/new_files/kenkyu/guideh21fukyuu.pdf (2016 年 12 月 2 日閲覧)
- 厚生労働省(2016) 平成 27 年度 地域子育て支援拠点事業実施状況。 http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidokateikyoku/kyoten_kasho27.pdf (2016 年 11 月 30 日閲覧)
- 森下正康・阿部恭子(2013) 母親と父親のかかわりの特徴と幼児の社会性発達との相互連関。発達教育学研究,

- 7, 35-47.
- 中道圭人（2013）父親・母親の養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響. 静岡大学教育学部研究報告, 人文・社会・自然科学篇, 63, 109-121.
- NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会（2016）地域子育て支援拠点事業に関するアンケート調査 2015. 地域子育て支援拠点における「つながり」に関する調査研究事業報告書. http://kosodatehiroba.com/new_files/chosa/away-ikuji-hokoku.pdf (2016年10月28日閲覧)
- 小田和子・河内彩・稲垣由子（2011）甲南子育てひろば参加者の子育て意識・実態調査からの一考察. 甲南女子大学研究紀要, 人間科学編, 47, 35-46.
- 労働政策研究・研修機構（2015）子どものいる世帯の生活状況および保護者の就業に関する調査 2014（第3回子育て世帯全国調査）. <http://www.jil.go.jp/institute/research/2015/145.html> (2016年10月28日閲覧)
- 菅原正和・伊藤由衣（2006）児童期の母子関係が青年期の自我形成に及ぼす影響－自尊感情（Self Esteem）と対人不安を中心として－. 岩手大学教育学部研究年報, 65, 31-44.
- 徳田完二（1987）青年期における自己評価と両親の養育態度. 心理学研究, 58, 8-13.